



「タクシーの幽霊」 生と死と宗教と

五城目出身学生らの論文めぐりシンポジウム

宮城県石巻市のタクシー運転手が語る「幽霊」現象をとりあげた五城目町出身の学生の論文が反響を呼んだことを受けて、東北学院大（仙台市）は24日、「霊性を読み解く」と題した緊急シンポジウムを開いた。震災から5年、人々は多くの死にどう向き合ってきたか。宗教の役割は、識者らが論じた。

「幽霊」の論文は、同大4年で社会学ゼミに所属する工藤優花さん、五城目町出身の調査、執筆。他の学生の論文とともに「呼び覚まされる霊性の震災学」の題で新聞社（東京）から出版された。2月5日付朝日新聞秋田版の記事などをきっかけに、ネット上で大きな話題となり、海外でも報じられた。

工藤さんはシンポジウムで、幽霊を乗せたタクシー運転手らが、恐怖心ではなく、畏敬の念を持つようになった背景を説明。「震災を過去のことでとらえ、復興に挑む人がいる一方で、前を向ききれず心が追いつかない人がいる。そうしたグレーゾーンを抱えた心が幽霊現象に反映しているのでは」と話した。

シンポジウムには約150人が集まり、ブラジルのメディアも取材に訪れた。仙台市青葉区の東北学院大

心にグレーゾーン・喪失・喜怒哀楽…議論

ゼミを指導した金菱清教授も「震災5年、復興のピリオド」という外部の視線を感じる。だが、行方不明者を多く出すような津波災害では、死者でも生者でもない「あいまいな喪失」がいつまでも残る」と指摘した。

宮城県栗原市の住職で、被災地で傾聴活動続ける金田諦應さんは、霊に関する相談もよく受けるという。「震災のように風土が危機的状況に陥った時、あらゆる感情が解き放たれる。むきだしな生と死、喜怒哀楽に向き合い、ケアをしてきた」と話した。

仙台の出版社「荒蝦夷」の土方正志さんは、約100年前に書かれた柳田国男の「遠野物語」の中にも、明治三陸津波で犠牲になった妻の亡霊が夫の前に現れる話があることを紹介。同社が主宰する「みちのく怪談コンテスト」では、震災に関連する話が多数寄せられているという。

宗教学者の鈴木岩弓東北大教授によると、日本では様々な世論調査で、4〜6割の人が死後の靈魂の存在を信じる。鈴木教授は「死後の世界をどうとらえるかは文化の問題でもある」とし、東北にはイタコなどシャーマニズムの伝統があったことも、指摘した。

（石橋英昭）